

Miles Davis のアルバムをより理解するための数冊の本

何よりもまず「アルバムを聴くこと」が大原則ですが・・・。

しかしそのアルバムの成り立ちや制作状況を知ることが作品をより深く理解する上で役に立つこともあります。取扱が難しいのはそのアルバムに対する各種の評価です。

これについては自分自身の評価や印象を最優先とし、参考に留めることが無難です。

まず第1番目は「詩人・ジャーナリスト/コロンビア大学・ニューヨーク市立大学教授」という肩書きを持っていたクインシー・トランプが1985年に行ったマイルス・デイビスへのインタビュー録音から1989年に書き起こした『MILES DAVIS The Autobiography』です。

1989年はマイルスが亡くなる2年前なのですが、この著作は中山康樹氏により1990年に『完本マイルス・デイビス自叙伝(ON MUSIC)』として翻訳出版されました。

現在は『マイルス・デイビス自叙伝 I・II』(文庫本)として入手可能です。

この本には約40枚のアルバムについてマイルス自身のコメントが記載されています(必ずしも客観的な解説とは言えませんが)。

次は1997年の『新・マイルスを聴け!!』です。これは2000年に『マイルスを聴け! 2001』として文庫本化されました。

最新版は2008年の『マイルスを聴け! 8』ですが、中山氏が入手したブートレグをこれでもかと追記したため文庫本としては異例な厚さになってしまいました。

この本はそもそもマイルス作品の年代順リストとでもいうべきもの、こうした意味合いからすると「2001版」でもう十分だと思います。

中山氏の個別のアルバムに対する感想評価については“それはそれ”といったところです。

3番目は2002年の(四谷イーグルの店主)後藤雅洋氏の『マイルスからはじめる JAZZ 入門』です。ジャズ全体の流れの中でマイルスの代表的な作品が解説されています。

JAZZ 入門書ということで、ある意味とても親切、手取り足取りといった構成ですが、単なる“好き嫌い”“良い悪い”という内容ではありません。マイルスの作品をかなり聴き込んでいる人にとっても読み応えのある本だと思います。

4番目は2004年に翻訳出版された『マイルス・デイヴィスの生涯』です。

原著は、イェール大学教授で専門が人類学・アフリカ系アメリカ人研究・音楽およびアメリカ研究というジョン・スウェッドの『SO WHAT—THE LIFE OF MILES DAVIS』

(2002年)です。

この本は基本的に多くの関係者の証言などにもとづくマイルス・デイビスの伝記であって、マイルスの作品の解説を目的としたものではありません。

しかし Columbia 時代のマイルスの作品については、Columbia の関係者にインタビューし残されていた記録も綿密に調べたのでしょう、自叙伝では触れられていないレコード会社側からみた作品の成り立ちを知ることが出来ます。とはいえ全体的には信憑性に欠ける点があります。例えばアガルタ・パンゲアのリリースについての記述は事実と全く異なっています。

また、巻末のディスコグラフィーについても、個別のアルバムの細かい記述に間違いがあります。『マイルスを聴け！』と照合するとよいと思われます。

5 番目は『ガチンコ勝負！！！！白熱 MILES 鼎談（てんだん）』です。

これは第一部が 2001 年に行われた後藤雅洋・中山康樹・村井康司各氏がマイルス作品のベストテンを選ぶ論議、第二部はその 7 年後に 3 氏が再会して話し合いをした内容を 1 冊にまとめたものです。

3 氏が議論をしながらベストテンを選出する過程は参考になるかと思えます。

ただし、くどいようですが、マイルス作品の聴き方・評価は“人それぞれ”が自然です。なお、第二部で村井氏が紹介している菊池+大谷氏の『M/D マイルス・デューイ・ディヴィスⅢ世研究（上・下）』（文庫本）は、基礎資料が上記の「自叙伝」と「生涯」ですし、目的がマイルスの人物像の研究ですから、作品に対する理解を深めるという目的には合致しないでしょう。

マイルス作品の関連本としては以上の 5 冊ということになります。

しかし、やはり何と言っても、マイルスの作品を理解するためには作品を手にとって実際に聴くことが一番良い方法です。

さてマイルス作品の聴き方について： 上記の 5 冊には特にヒントが書かれていませんのでごく簡単に補足しておきます。

レコード時代（これはマスターがテープで作成されていた時代とほぼ重なります）の作品は CD でなくレコードで聴くということです。いわゆるオリジナル盤ではなく再発盤で OK です。CD の場合、LP レコードに比べて S/N 比が格段に良いのでどうしてもテープノイズを除去せざるを得ない、そのプロセスで本来のサウンドに影響が出るのだと思います。

ただし、米国オリジナル盤の再発盤の場合は CBS ソニーの国内盤ではなく海外盤としてください。1980 年代なら CBS ソニーの国内盤でも大丈夫じゃないかという説もありましたが、“STAR PEOPLE”で確認したところ、やはり問題があります。

ミュージシャンは音楽語（メロディー語とリズム語？）を用いて何かを表現し伝えようとしているわけです。それを出来るだけ聴き取るために多少の苦労はすべきです。

また、マイルス作品を是非同時代の他のミュージシャンの作品と対比させながら聴くとその特徴が際立って分かり易いと思えます。 以上